

特集『マイケル・ポランニー』

科学の言説・法の言説

情報の言説技術論

橋爪大三郎



近代科学をはじめとするわれわれの言語行使用は、事実と意見を峻別し、事実についての真なる知識をえようとする強い動機に支配されている。こうして織りなされる情報空間の様相を下敷きにする、科学を個人的知識として再定位しようとするポランニーの試みが、よく理解できる。しかし彼の議論は、言語ゲーム論に照らしてみると、不徹底なところがあり、法の理解も核心を外しているようだ。

【1】マイケル・ポランニーの「個人的知識」をひもといて面白いのは、多くの話題を扱い、複雑な議論を展開しているようだが、たまたま二つのことだけをいわんとしている（と私には思われる）ことだ。すなわち…

- (1) 科学の問題、あるいは普遍的知識を確立するという問題は、結局、言語行使用（なかならずコミュニケーション）の問題に帰着するであろう。
 - (2) そうした行為（言語行使用）は、キリスト教によく似た宗教的な動機づけ（倫理）によって支えられるはずである。
- 考えてみれば当たり前の話で、とりたてて驚くべき主張とはみえない。構造主義を経過し、ニューアカの軽みにも慣れたこの頃は、

について彼が断片的に論ずるところをとりあげ、その問題点を記すことにしたい。

1 事実／意見

【2】今日われわれの言語の用法の、あまりにも自明な前提となっているため、かえって自覚しにくいこと。そのひとつが、事実／意見の峻別である。

事実／意見の峻格な分離は、おそらく宗教上の起源をもっており、政治・法・報道など重要な領域のすみずみに浸透するにいたった。これはひとつの制度——言語の用法に関わる社会的な規範——である。科学も、言うまでもなく、この制度を裏打ちされて成立している。

「ほんとうに起こった出来事」といういみでの事実には、「誰かが勝手に考えたこと」といういみでの意見を漠然と対置するぐらいのことは、あらゆる社会に見出されよう。どんな言語でも、叙述／伝聞／態度表明／…といった区別を知っている。

ここでいう事実／意見の分離は、そんななまやさしいものではない。この世でおよそ知るに値することがらは、事実か意見かどちらかであると決めてかかり、実際ことごとくをそうやって分析してしまう。これは非常に特別な態度である。われわれはそこをよく自覚したほうがいい。

啓蒙家はしばしば、こうした態度の形成を、科学の恩恵とみながら、科学の主張が真であって迷信よりもまさっているため、ひとびとの信頼をえ、科学的な態度が生活全般に普及したのである、と。むしろ逆であろう。科学が受容されるためには、ひとびとの側にそれを受け容れるだけの素地がなければならぬ。事実／意見の分離を

だがこの主張には、われわれには見えなくなりかかっている重さがかけられている。「科学的」社会主義が国家「社会主義」と手を結んだり争ったりしながら、人間を百万人ずつ束にくくって片端から殺戮した時代。

科学を専一に志してきたポランニーが、こうした時代に傷めつけられ、科学という活動そのものへの反省を深めざるをえなくなつて、ついに個人的知識(Personal Knowledge)の信念にたどりつく。このプロセスは、だから、彼の思索に内在して追体験する値打ちがある。ポランニーは、科学が現代の宗教戦争を惹き起こすことに、心底からの恐怖を覚えた。科学が方法的懐疑を具えているとしても、ものの役に立たない。現代の狂信主義は、「懐疑主義に根差」(Polanyi [1958=1985:281]) すらである。

私は、マイケル・ポランニーのことをよく知らない。けれども、もしも彼の主張が上の二点だとすると、それは私の考えてきたことでもある。彼の叙述は——ホフスタッターと違って素直な文体だが——必ずしも見通しがよくないようなので、それにはあまりこだわらず、この問題に関する私の見解を述べてみよう。そして、彼の議論の不徹底なところを少々指摘しよう。さいごにおまけとして、法

おしすすめる特別の態度がまず出発したのであり、科学のほうがその一分岐なのだ。

【3】近代社会は、事実／意見の峻別に立脚している。もしもそれが峻格に区別されなかつたら、作動しないだろう。

では、事実／意見を峻別するこの特別の態度は、近代をさかのぼるどの段階で、決定的に出現したのであるか？ 大方の説は、それが宗教改革期であったという。特に、カルヴァンの教説、ピューリタンの教義あたりが、それらしい。そこで、ひとつの見取りを描いてみよう。

カルヴァンの衝撃が、強烈である理由はなにか？ それは彼の預定説にある。預定説の教義は、人間が神に働きかけるあらゆる手段を奪った。ひとびとは、もはや自己救済のなんの足しにもならない理性をもって、この世俗的な世界に、バラバラに取りのこされる。地上の教会は無意味である。互いの信仰や救済を確認することもできない。手ひどい、知的孤立。

もとり近代人が、残らずカルヴァン派なわけもない。だがこれは重大な兆候である。カルヴァンの教説が排除し、破壊したものが重要だ。たとえば理性の分有説(流出説)。「神学大全」いわく、人間理性は、神的理性と同一でこそないもの、それをかたどつたものである。この世界は神的理性に従っている。人間理性がその秩序を読みとること、ひとびとは揃って神の方向を向くことが可能(Thomas [nd=1971:86])。——こうした調和は、破られてしまった。

【4】カルヴァンのように研ぎ澄まされた自意識が、事実／意見の峻別にどのような宗教的動機づけを盛りこむのか、スケッチしよう。地上に生起する一切の事実は、神の創造の御業にほかならない。

その全体が、神の偉大な計画をあらわしている。そこで、普遍的に妥当する知識にいたることが、知的活動の究極の目標となる。その際には、各人は事実認識のちがひによっていかにあうことなく、ひとつの知的な共同体を形成することができるかもしれない。(それは神にたしかえる道でさえありうる。)

ところがいざ、普遍的な知識を手にしようとしても、すべての事実に自分が立ちあうことは不可能である。したがって、他のひととが事実として報告すること——証言——にも、なにがしかの信をおかなければならない。実際、「われわれの事実に信念の圧倒的な割合は引き続いて、信頼している他の人から二次的に得なければならぬ」(Polanyi [1958 II 1985:194])。各人は、自分の知りえた事実を報告しあうことで、互いに結びあう。こうして、地上の教会によく似た、知的に活動するひとびとの網の目状の配置ができていく。しかしながら、罪深く神に背きさえする他人に依存することは、誤りの源泉でもある。神に事実についてより多くを知り、しかも誤謬からは逃れること。この困難な課題が、ひとりひとりを捉えはじめる。

2 情報の基本操作

【5】他者の証言を採用することによって拓かれる地平を、情報(information)の地平と呼ぼう。情報は、複数の人間のあいだで生ずる社会現象であり、他者の報告に対する方法的な関わりを含蓄する。情報に、どのような定義を与えるべきだろうか？ いろいろ考えられるが、私はつぎの定義が気に入っている。
「事実や状況について人につたえる知識、または人からつたえられた知識を情報という」(木下 [1981:6])

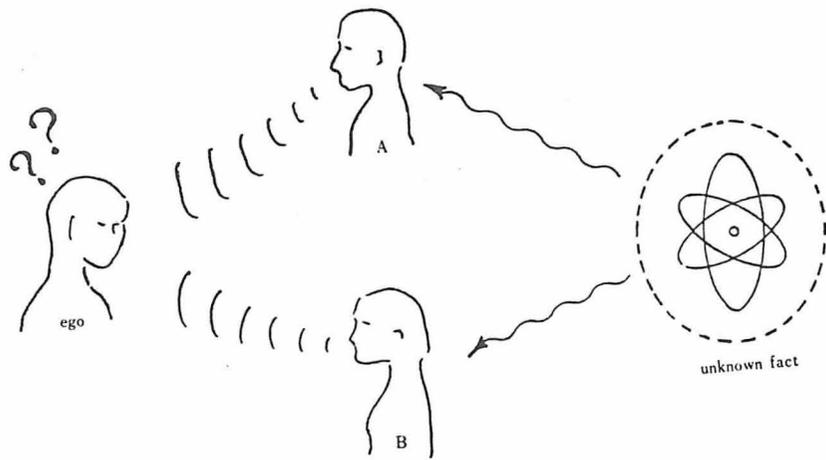


図1

明快な定義である。明快すぎて、なにもつけ加えられないほどだ。でも一応解説しておく、ここで「事実」とは、実際に生じた何らかの出来事のこと。「状況」とは、そうしたいくつかの事実の複合。「知識」とは、事実や状況に対応する言語的な表現のことだ、と考えられよう。

ひとひとが互いに言葉を交わしている。その内実は多彩なはずだが、いったん事実/意見を峻別し、そこから事実だけを汲みとろうという態度でそのむと、単純に映る。ひとひととは証言者の一群であり、引用や注釈を繰り返しながら、私に事実の全体を伝えようとしている。彼等の発する言葉は、彼等の相対的な位置関係ないし主観性によって歪んでいる(すなわち、意見を交えたものになっている)けれども、そこにはまた私の必要とする事実も隠されている——。

【6】こうして拓ける情報の地平から、どのようにして普遍的な知識にいたればよいのか？ 他者の伝える報告から、どのようにして事実に対応しない部分を除去し、正しい情報だけを選びとれるのか？

これに厳密な解決を与えようとすると、絶望的にみえる。問題の報告の真偽を判別する基準が、当の事実以外にあるわけがない。が、その事実を、問題の報告と独立に直接知ることができるくらいであれば、そもそもこの報告に頼らなくてもよかつたろう。だから、肝腎の報告の真偽は、決して知りえないわけだ。

けれども、こう絶望してすませることはできない。われわれは、ある事実や別の事実を疑ったり否定したりはできても、すべての事実を疑ったり否定したりはできないから。実際、「任意の明示的陳述を疑うことは、その陳述に表現される信念を疑い、当面は疑われていない他の信念を探ることを含蓄する」(Polanyi [1958 II 1985:256])。

なにかを事実として信じなければならぬのなら、それはなにであらうか？ これは実践的に解決すべき問題である。

【7】このあたりの事情を見やすい図に揭げてみよう(図1)。自分では接近できないある事実(unknown fact)について情報を得ようとしている人物(ego)がいる。彼は、情報活動の主体である。彼がまずなすべきなのは、問題の事実を接することである(できた人物を複数みつけ、彼らの報告を入手することである。簡単のため、彼らをA、Bの2名とし、egoはこのふたりの証人からじかに報告を受けるとしよう。ここで重要なことは、A、Bの連絡がなく、ふたりが独立の証言をなす、ということである。(証人がひとりしか得られなかったり、証言が独立でなかったりすれば、議論の前提が崩れてしまう。)

同じ事実に関するとしても、ふたりの証言は一般に一致しない。ときには矛盾するかもしれない。しかし、喰い違いや矛盾の原因が神であるはずがない。事実はひとつである。そこで、喰い違いや矛盾は、A、Bいずれか(もしくは双方)に由来することになる。記憶違いか、観点の相違か、悪意か、はともかく、証言者が介入すれば必ず攪乱要因も混入してしまう。情報活動の主体はこれを、事実と区別して、彼らの(広義の)意見(views)とみなす。

証言は、事実ばかりでなく、意見も輻輳して伝える。そこで問題は、証言のなかから意見の部分を捨て去って、事実の中する部分(真実)だけを抽出することだ。が、どの部分が真実なのか？ もとよりegoには不可知である。複数の証言のうち一致する部分は真実である、などと言われるが、あてにならない経験則にすぎない。

結局、証言から事実を抽出する客観的・機械的手続きは存在しない。あるいは、逆に言ってもいい。もしも情報の主体が事実を手

入れるとしたら、それは彼が、自分の責任で、なにが事実であるかを判断した結果なのである。このあと300は、問題の事実を自分が直接見聞きした場合と同じように確定したものとして行動しはじめるだろうが、それがその実彼の判断にすぎないという事情に変わりはない。

図1の配置にはじまり、この判断(事実の確定で終結する一連の手順を、情報の基本操作(the fundamental operation of intelligence)と言おう。この操作を通じて、egoは事実が何であるかの最善の判断に達する。なお、副産物もある。証言の事実からの偏りを根拠に、Aの意見・Bの意見がそれぞれどんなものか、までも理解できてしまう。

3 情報の言説技術

【8】事実を知るのには、その知識を前提として次の行動をおこなうためでもある。情報の主体は、行動の主体である。事実を前提として行動するのだから、行動をおこなった段階では、なにが事実か確定する。たとえば死刑の執行は、容疑者が罪を犯したことを前提とする行為であつて、いままさら、もしかしたら……などと思いかえす余地はない。行為者にとっては、確たる事実が存在する。けれども彼は、これが判断の結果にすぎない(したがって不確定である)ことを、知っている。われわれの知る事実、必ずこうした二重性を帯びている。

事実が、事実とは正反対の判断を通じてしかえられないという逆説不確定性は、最後までついてまわる。知識はだから、真実そのものではないが、真実に漸近するものとして、真理を顕わすのである。

らに同じような別の人々がわれわれに至るまで伝えたスナナ(Khatat [935-119350])にほかならない。またサヒーフといつて、証言者の連鎖がとぎれなく個々人の信頼性も完全なことも大切である。こうしてムハンマドの時代から現在のイスラム共同体に到るまで、太い証言(イスナード)の鎖が繋がっていることになる*2。これが、コランの正しい適用を証拠だてるわけだ*3。

9*1 危うさは「解釈学的循環」から生じる。橋爪 [935c]を参照。
9*2 証言の確度を証拠だてるには別の証言が必要なのではないか、などと考えるはじめる、これで弁証になっているのか悩ましいが、この点には立ち入らないでおこう。

9*3 ムタワールなスナナといえども、形式的に考えれば、誤謬を含みうる。ムハンマドの言行を歪めて伝え、法を誤らせてしまった可能性が絶無とは言い切れないはずだ。(各人の誤りが確率的であれば、それは積の確率に従う)けれどもそれは、イスラム共同体が到達しようとする「極大」な確実性である。そして、これを信頼しないことには、イスラム法に従った実生活をおくることができな。だから、イスラム教徒のふるまひのなかではこれが、事実そのものである。

【10】イスラム教の言説技術は、絶対者アッラーの命令に確実に繋ぎとめられようとする熱情によって、加速されていた。科学にも、これと同様の強烈な動機が働かう。科学は、事実の秩序への信念を基点とするが、それは絶対者の視線によって照らしだされてもいるはずである。われわれ人間のあやふやなことばづかいを、少しでも事実を反映するものに整序しなければならぬ*4。事実があるはずだ、という信念のまえでは、われわれの発言は意見に汚染されたものにみえる。汚染を吸いよせるのは、ひとびとの身体である。われわれの情報空間は、言語によって張りめぐらされ

知りうる事実の範囲を上げ、なおかつ真実に漸近する度合を高めようとするなら、図1の最も単純な場合を、つぎのふたつの方向に拡張しなければならぬ。

(a) 証言者の人数を増やす。
(b) 間接証言(証言についての証言)も、採用する。

ある事実についての(独立な)証言者の人数が増えれば増えるだけ、確実性は増す。けれども逆に、証言の連鎖が何段も重なるほど、確実性は減少してしまう。われわれの社会では、(a)十分多数多くの証言者が、(b)幾段にも重なって証言を伝える、というほうが普通だ。これをいちいち、事実/意見に分解し、情報の確実性の吟味をしてい

たのでは、大変である。

【9】そこで、証言を通じて事実を確認する社会的な技術が出現する。これは、イスラム教のもとでみごとに発達した。これには理由がある。イスラム教は、二重の幸福説に立ち、地上に神の法を施行する。そうして成立するイスラム共同体は、正しく神の法に従っていることを弁証する必要がある。それは救済の条件だ。ところが、使徒ムハンマドが死に、アッラーからの連絡が途絶えて以後、この弁証は危うい*1。この危うさに抗して、権威ある事実にかかざる証言の堆積が求められる、というわけだ。

コランに次ぐ法源、スナナ(ムハンマドの言行)は、伝承(ハディース)のかたちで伝えられている。伝承とは要するに、証言の連鎖である。誤りかもしれない証言の内容が法判断の規準になるとすれば、転倒に違いない。そこで、ムタワールの観念がもちだされる。伝承の信憑性は、証言者の人数と個々人の信頼性に依存する。ムタワールのスナナとは、通常その全員が一致して虚言を伝えることが不可能なほど(タワートル)の人々が使徒から伝え、それをさ

た、諸身体の散在である。この空間のなかのある身体上に、個人の位置はあるのだ。真理は、実在するものではなく、この情報空間のなかで定義される。情報空間がそこへ収束しようと運動する指向の、かりそめの準拠点の名称である。

この情報空間は、実体的な知識(真理)のかわりにただ、知識を批判的に獲得する取捨選択のルールだけを共有する。この空間で、知識は二重の存在性格を帯びる。すなわち、知識が、①自分にとってある場合と、②他者にとってある場合。前者は、当人の生きる前提であり、当人のふるまひのなかでは事実そのものである。それに対して後者の場合には同じ知識が、別人の下した判断として映じ、分析の対象となる。この結果、各人が情報空間の知識の総体を掌握(comprehend)したその内容は、決して互いに一致しないことになる。なぜなら、情報空間のなかで、各人はその位置を異にしているからだ*5。

ポランニーが科学を、「個人的知識(personal knowledge)」としきりに称するとき、いわんとしていのはまさに以上のようなことである!——この急所をおさえて読むなら、ポランニーはすらすらとよくわかる。

情報空間は、各人ごとに、事実についての見取りを内蔵する。これを裏から見れば、各人ごとに、意見(事実からの偏差)についての見取りを内蔵している、ということでもある。他に帰せられない意見は、独創(originality)と価値づけられる。(言うまでもないが、ひとがある意見を持つということも、それ自体ひとつの事実である。)こうして、独創性を追認する(言語)ゲームが、情報空間のうえに展開しようだろう。科学も、そのようなもののひとつである。

10*4 科学がイスラム教と異なるのは、神からのメッセージの特定の経路に

固執せず、いたるところにある事実についてあらゆる方向から情報を收拾しようとしている点であろう。

10*5 ポランニーは、各人が情報空間に参画する「コミットメントと表現」している。①/②の知識の二様相については、Polanyi [1958=1985:286] に参照する記述がある。

4 科学の言説

【11】科学は、西欧近代が生み出した、四百年の厚みにわたる言説の蓄積である。この特質はなにか？

この際だから、おおまかな見取りを与えてしまおう。それは、言語と世界（JM事象）との対応に真理をみとめる伝統的な真理観を軸とする。その軸に、①すべての事実を個々人の手許にもたらす情報の言説技術（これは、前節までに検討した）、②それらを少数の前提から演繹的に導出しようとする理論構築、の両輪が発展したものだ。

伝統的な真理観は、ユダヤ教（特にその契約観や言語による創造の教説）とギリシャの合理主義との交配のうえに成立した、と信じられる。その中世的な表現、たとえばトマスにいわく、「人間が形づくるとは自らによって真であるのではなく、事物と合致することにもとづいて真であるといわれる」。じつさい、人間がいさぐさ見解は事物がそのごとくあるか、あらぬかにもとづいて、真もしくは偽となる。（Thomas [nd. 1977:48]）。けれどもこの段階では同時に、事物の背後に神的知性が想定され、人間がそれを分有するとされる。だから、情報空間における知識の個人的様相が赤裸に露呈することはない。

伝統的な真理観は、真理が固定して実在するという信念の岩盤を育む。科学はまず、そうした信念に抗うもうひとつの真理を実体的

【12】運動としての科学がたどるプロセスは、いろいろな記述が試みられてきた。反証主義によるモデル。パラダイム論。アナキズム。……。けれどもこれらが、科学の運動をくまなくとらえきつたとは思えない。これに対してポランニーは、科学を「個人的」知識と断言することにより、別な角度から光をあてた。すなわち、情報空間のなかに、科学の運動を据えなおしたのである。では、ポランニーは十分先まで進んだらうか？

科学を語ることの困難。それは、つぎの点にある。科学は事実/意見の分離を前提にする。理論（仮説）意見を実証するために、それを、理論とは独立な事実と突きあわせてみなければならぬ。科学に内在していると、事実と意見（理論）はちゃんと分離しているようにみえる。ところが、情報空間の検討が明らかにしたように、事実と理論（自分の意見）なのである。科学論の言い方に直すと、「観測の理論依存性」ということになる。事実が理論に依存し、理論から独立でないとすると、実証の枠組みが崩れてしまう。科学は、なにより、その知識（理論）の正当性を主張すればよいのか？ われわれの科学が普遍的な真理であることの根拠を。

これが困難にみえるのは、もちろん、「普遍的な真理」の客観性を信じているからである。ポランニーはこれを攻撃する。彼は、個人が参画しない、客観的真理の超然性を信じることは有害だとする。この線を押すすめらば、ある種の文化的相対主義に達するであろう。すなわち、ある知識が「普遍的な真理」として通用するのは、まさにひとびとがそれを普遍的な真理とみなすからである、という理解。あるいは、真理を社会的な習俗に還元すること。

ヴァイトゲンシュタインの議論（言語ゲーム）は、これにかなり近いところにある。けれども、科学者ポランニーは、科学に「棲み込む（dwell in

に掲げること、これをひび割れさせた。信念の岩盤が完全に打ち砕かれたあとでは、これは、仮説的な真理（競合的併存）に移行する。これが今日の科学——経験的な妥当性（実証性）をもち、仮説・演繹系（理論）に編成された知識——にほかならない。

科学の与える真理は、さしあたり妥当な仮説的主張ぐだいて言えば、科学者の意見にすぎない。いくら大勢の科学者の意見が一致しても、それが真理に決まるわけではない。意見が自由であるように、科学は真理の内容に限定を加えないが、方法（実証法）については、厳密な洗練を加えている。そして、現象の階序・実証法の種別に応じて、科学は分岐をとりあげてゆく。

科学は、つぎのようなみで、情報空間のなかの運動の一種特殊場合である。各人（科学者）は自分の意見として、めいめいの仮説を抱いている。そして、他者の伝える事実（証言）ばかりではなく、他者の意見（仮説）にも重大な関心を払っている。異なる仮説は許容されるが、潜在的に敵対しあっており、事実と相違する場合には捨てられる。これが科学のゲームを成り立たせるルールであり、それに従うひとびとが科学者集団（scientific community）をかたちづくる。

科学にあつては、したがって、ひとびとの意見（仮説）は緊密に連動する。なぜならば、科学者の意見（仮説）は、事実についての意見であり、事実が一義的であるなら、意見のほうも一義的に収斂するはずだ、と信じられているから。科学者は、（少なくとも建前では）自分の意見（仮説）をいつでも放棄する用意をしながら、どれがいちばん強力な仮説かを尋ねあう。こうして交わされる言説のなかに、その究極のかたちとして、真理が浮かびあがる。ちょうど、修行者たちの集団にすぎないサンガの総体のなかに、ブツダの悟りが宿る（僧中有仏）とされたように。

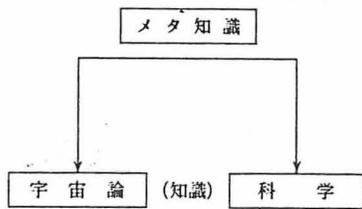


図2

【13】「視点（内部的視点）を手放さないでいつまでも議論する。その分不徹底であるようにみえる。」

【13】ポランニーの不徹底さについて、考えよう。

私が目をひかれたのは、彼が、未開種族の土着の知識（宇宙論）と科学とをひき比べ、前者を劣ったものとして斥ける点である。むしろ私も科学のほうだが、よいものであるとは思っている。しかしそれは、私が科学を知っており、科学との関わりのもとで生きていくからではなからうか？

アザンデ族のひとびとにも、同じ権利で、自分たちの宇宙論をよいものだと思う可能性が（私には視えないが）開かれていく（はずだ）。未開の宇宙論と科学とを無条件に、すなわち私が生きる文脈抜きで、比較評定できるためには、そうした知識をのこらず対象化できる、メタ知識の立場にたつ必要がある（図2）*。

そこで問題はこうなる。ポランニーは、科学についての反省をすすめ、客観的真理の超然性を否定した。それでも彼は、科学者であり続ける。自分の従う科学の運動を保守しようとする。それは、①メタ知識の立場からなのか、それとも、②科学に内在する視点からなのか？ 前者であれば、その規準が問題となる。また後者であれば、相対論に対して無防備にすぎない。

れていないと思える節がある。それが、不徹底とみえる理由である。彼は謙虚にこう言う。「私の考えでは、客観主義的な立場にとつて代る安定的な代替物を確立するために必要とされる観点の変化は極めて広汎なものなのだ。私は……可能性を開示する以上のことはできない」(Polanyi[1958=1985:298])。なるほど、途はあるというわけだ。けれども、彼が開示しようという可能性は、①/②の区別に照らし、果たして現実味のあるものか？

「個人的でしかも普遍的な知識」という観念が成り立ちうるかどうか。——問題の鍵はこの一点にかかっている、と言つてよい。

13*6 ヴイトゲンシュタインなら、そんな立場は不可能だとするだろう。私は、もう少し別なふうに考えてみたいが。

【14】ポランニーは、個人的な知識が普遍的であ(りう)ると言う。ただし、「普遍的」という語のいみが、客観主義の場合とずれて

いる。ポランニーはまず、個々人の知的なふるまいに「普遍的な意図」を認める。「われわれが知ることは独立に存在すると信じられる実在についての何か真実のことを言おうとするがゆえに、あらゆる事実の断言は普遍的意図を帯びている」(Polanyi[1958=1985:293])だがむろん、意図に裏書きされるだけで、事実についての発言が普遍性を獲得できるわけではない。

そこでつぎに彼は、個々人のふるまいを、倫理的ないし宗教的に描きだし、ひとびとの発言が調和にいたるはずだ、と考える*7。「私はこう信ずる——含まれている危険にもかかわらず、私は真理を探究し、自分の知見を述べるよう(天職(calling)として)命じられているのだ、と。」「結果は、明らかに、個人個人で異なっているが、しかし、その差異は個人の恣意性に起因するものではないから、各々

結論。ポランニーの議論からは、知識の記述学(ないし科学の運動)の内的視点にたつた報告)としてのみ多くを学び、知識のメタ理論としては学ばないこと。——これが私の提案である。

14*7 この「解決」は、社会学者パーソンズやルーマンの「規範解」とよく似ている。橋爪[1985a]を参照。

14*8 ポランニーは、この種のしつこい疑問を懐疑論とよんで、相手にしない。そして自分の立場を、唯我論や相対論と区別している(Polanyi[1958=1985:299])。

5 法の言説

【15】最後に、編集部から私への本来の注文であった、法に関するポランニーの見解についていささかのべ、義務を果たすことにしたい。

困ったことに、法やそれに関連する社会制度について、ポランニーは多くを論じていない。そこで、断片的な記述をつなげ、彼の見解を再構成してみよう。

ポランニーが法について触れたのは、法も情報の言説技術を使使するからだろう。法廷は、まず法的事実を確定し、それから法判断をくだそうとする。法的事実は、経験的事実を再構成したもので、数学的概念みたいなものだ、と彼は言う(Polanyi[1958=1985:263])。これはこれで、当たっているかもしれない。けれども法判断は、「何が事実であるか」をめぐる判断とはまた違った性質の判断(つまり裁定)ではないだろうか*9？

ポランニーが、法やそのほかの社会的な領域を、知識論の延長でどのように想い描いているか、彼自身ののべるところをもう少し追つたほうがよい。

は正当にも各自の普遍的意図を保持し続けるのである。：彼らはみな、自分たちの知見が最終的には一致するか、互いに他を補うかすることを望んでよい。：各々の個人は別々のものを真だと信じていることができようが、真理は唯一なのだ。』(Polanyi[1958=1985:298])

ポランニーが「私」の名で語っているのは、科学の運動に内属する身体の一般的なありかたである。そのふるまいは、真理が客観主義的に信じられる場合の科学と変りない。ポランニーは、客観主義的な真理を斥けたかわりに、ひとびとが真理に対する帰依を分けもつことを想定する。そうすれば、なるほど、科学の運動はこれまでも同じようにうまく進行するだろう。けれどもそれは、そこで信じられている知識が普遍的な真理であることを、ちつとも保証しな

いはずだ*8。

ポランニーのいうところは、科学の運動(ゲーム)の記述としてはなかなかすくれている。しかし、これをそのままゲームの正当化(メタ知識)とみなすなら、誤っている。ポランニーは、ここを区別せず、曖昧にしている。

ポランニーの議論が、ヴイトゲンシュタインと似ているという指摘がよくあるようだ(例えばDaly[1968])。たしかに、並行する議論がかなり多い。けれども両者が決定的に違っているのは、いまのべたところなのである。言語ゲームの考え方からすれば、あるゲームは、それが営まれているという事実以上の、正当化や根拠づけを要しない。そもそも根拠づけは不可能でもある。科学を記述し理解するにも、科学的内的視点(客観主義的な真理が映すること、外的視点(知識の相対性が見出される)のふたつがあれば、必要にして十分なはずである。それに対してポランニーは、「私」の信念の開陳がなにごとであると信じたのだ。

「社会の組織化」に関する部分では、こんなことを言っている。——知的遺産の伝達やコミュニケーションを論じるだけで、個人間の責務の関係をみないと、社会の組織化を理解できない。集団生活には、共同の福利がともなう。個々人は、共同の福利を認知し、自分を犠牲にして集団に尽くす(という責務を負う)。社会の組織化には四つの作用因(信念・仲間関係・協同・強制)が認められる。未開社会ではこれらは融合しているが、発達した社会では、対応する四つの制度(文化・集団的忠誠・経済システム・公権力)を産みだす(Polanyi[1958=1985:198])。

ここでのべられていること(特に共同の福利の想定)は、トミストを連想させる。そして後段は、社会学者パーソンズの構造・機能分析の主張(A・G・I・L図式)となぜかそっくりである。パーソンズ流の構造・機能分析は、俗説であり、問題が多い*9。ただポランニーの趣旨はこのあたりにはなからう。

15*9 法理学者ハートであれば、それは「何がルールであるか」をめぐる判断だ、と言うかもしれない。

15*10 パーソンズ批判については、橋爪他[1983]を参照。

【16】ポランニーは続ける。——社会の知的遺産は、個人的なもの(文化)／公民的なもの(忠誠・所有・パワー)に大別される。公民的な制度は、道徳によつて支えられる。道徳は全自我をコントロールするから。

さて、理想的な自由社会には、個人的思考の自由を支える文化的制度がある。それと同様に、公民的思考(道徳的・法的・政治的意見)を自由に成長させる公民的な制度があるはずだ。統治機関は強制力を備えているが、それが振るうパワーは自由な思考のパワーとなるであろう。社会組織のそれ以上の細部は、彼にも不明であるとい

う。その「制度的枠組みを記述するのは、あまりに遠大なこと」(Polanyi [1958=1985:208])だ。

ところでなぜ、理想的な自由社会にもパワーが必要なのか？ 道徳だけで社会をコントロールするのは無理なのだ。法は効果的に強制的でなければならぬ。なぜなら：法律破りに対して違法者の犠牲において報いるという不正を創り出すからである。：強制は人間社会において可能でもあれば不可欠である。(Polanyi [1958=1985:210])

強制力ないしパワーは、独裁者の場合に典型的なように、ひとびとの自発的な支持がないのにひとり歩きして「剥き出しのパワー」となるかもしれない。この種のパワーはそれだけでも存在できるが、公共目的・正当性・規則などをかくれみのにしたがる。

法の改革は、せいぜい社会改革の一要素にすぎない。理想的な自由社会にあつては、公民的生活は、ただ道徳的諸原理の育成のみによつて絶えず改善されていくのだ。(Polanyi [1958=1985:209])

【17】ポランニーの法理解を、いくつかの特徴にまとめてみよう。まず第一に、道徳と法との区別。法の内容は道徳的であつてよいが、強制とむすびついている。いっぽう道徳は、公共の福利を反映している。

第二に、純然たるパワーの観念。法や規則や承認に関わりない、道徳とまったく無関係な「剥き出しの権力」が実効的でありうる。第三に、強制の要素が極小になり、道徳に回収されていく方向に、社会の進歩と理想状態をみることに。

まとめ方のせいかもしれないが、こうしてみると、特に新しい見解ではない。むしろトミズム以来の伝統にそつている。また第二点は、マルクス・レーニン主義の教条とも一致している(ついでに言えば、

る。

結局のところ、ポランニーの言語観は、伝統的なものではあるけれども、バランスを欠いている。それは、言説としての法を解明するには道員立てが不足しているようだ。だから彼に多くを求めむわけにはいかないだろう。

【18】ポランニーのような思想家をなんと評すべきだろうか。たしかに古臭い部分も多いが、大胆で新鮮な語り口にも目を見張らせられる。それに誠実そのもの。街角でふと五〇年代のびかびかのキヤデラックの疾駆する姿に出逢ったかのような、懐旧的な感慨にすら襲われるのである。その、未来へ飛びたんとするばかりのテールライン。

現代思想に居並ぶわれわれも、しかし、ものの数年を経ずして、彼よりも色あせ、古びてしまふに違いない。それもやむをえない。ほんのひとところでも、時代を越えてゆく金無垢の肉声を残せなすれば。

*本稿は一部、橋爪 [1984b] からの補筆・抜粋を含むので、おことわりいたします。また栗本慎一郎氏から、資料提供の便宜を受けたことをご感謝します。

文献

- Daly, C.B. 1968 "Polanyi And Wittgenstein". Lanford, T.A. & Potrat, W. (eds.) *Intellect And Hope: Essays in the Thought of Michael Polanyi*: 136-168. Duke University Press.
- 橋爪大三郎 1981 「孫の記号論」『記号学研究』1:95-106.
- 1984a 「知識社会学の根本問題——本稿——」(未発表)。

法を脅迫を背景とした命令になぞらえる。ここではオースティンと、自発的な支持抜きに独裁者のパワーが発動するメカニズムを説明するくだりはルーマンと、似通っている。

ポランニーの法理解は、保守的である。彼が受け容れない考え——それは、法を規則(ルール)とみなすものだろう。ヴァイトゲンシュタインは、法のルール説と親和的はなすので、ここでもポランニーとの距離は大きい。

ポランニーは、情報空間や個人的な知識の記述にあれば斬新な切り口をみせていながら、なぜ法を規則(ルール)とみないのだろうか？ 不思議な点である。いろいろに考えられるが、主たる理由は、彼の言語観が、(ヴァイトゲンシュタインがそこから身をひき離す以前の)論理実証主義の枠組みに固まっていたためではなからうか。

ポランニーは法的事実の確定に興味をしめした。けれども、法的言説の核心は、裁定にある。裁定の発話行為は、ひとびとの間にどのような責務の相互関係があるかをのべる。なにが事実生じたかではなく、なにが生じるべきであったかを。ポランニーは、こうしたタイプの言説が、知識(事実)に対応する言説に帰着できるかどうかの検討をさぼっている。というより、そうしたタイプの言説があることに注意をむけなかった。

もうひとつ顕著なのは、ポランニーが言語の習得を、徒弟制になぞらえている点である(Polanyi [1958=1985:193])。『詳記不能の技芸』という言い方は、ヴァイトゲンシュタインの「見る」を連想させるが、議論全体のトーンはむしろ、パーソンズ流の社会化理論に通じる。特に、暗黙の判断がひとびとの間で一致する傾向がある、とするあたり。言語の習得が外部からの刺戟にはなはだ大きく依存する、というのが彼の理解だとすると、それは大変に前チョムスキー的であ

1984b 「知識社会学の根本問題」『ソシオロジス』8:1-10.

1984c 「法の言説技術論」(未発表)。

1985a 「言語ゲームと社会理論——ヴァイトゲンシュタイン・ハート・ルーマン——」『勁草書房』

1985b 「書評「ゲーデル・エッシャー・バッシュ」」『エコノミスト』1985.11.19: 88-90.

1985c 「イスラーム教の言説戦略——言語ゲーム・ルール・テキスト——」『記号学研究』6. (投稿中)。

橋爪大三郎・志田基与師・恒松直幸 1984 「危機に立つ構造・機能理論——わが国における展開とその問題点——」『社会学評論』35-1 (137): 2-18.

Khallaf, Abd al-Wahhab 1942-1978 *Im Usul al-Fiqh*. Kuwait, Dar al-Qalam. = 1984 中村廣次郎訳『イスラームの法——法源と理論——』東京大学出版会。

木下是雄 1981 「理科系の作文技術」(中公新書 624)、中央公論社。

大木英雄 1968 「フェーリタン——近代化の精神構造——」(中公新書 160) 中央公論社。

Polanyi, Michael 1958-1962 *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*. University of Chicago Press. = 1985 長尾史郎訳「個人的知識——脱批判哲学をめざして——」『ハーヴェスト社』

Thomae Aquinatis (n.d.) *Summa Theologiae* = 1977 稲垣良典訳『神学大全 第13冊』創文社。

(はじめて たしやまのん・社説)

Discourses in Science/Discourses in Law: the Discursive Technique of Information by HASHIZUME Daisaburo